様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２０７６０

研究課題名（和文）炎症性腸疾患患者に対する看護師主導による電話相談システムの構築及び予備的介入研究

研究課題名（英文）Development of a nurse-led telephone consultation system for patients with inflammatory bowel disease and a preliminary intervention study

研究代表者
川上　明希（Kawakami, Aki）

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授

研究者番号：００７３４０２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：まず，先進的に炎症性腸疾患(IBD)患者に電話相談支援を行っている英国，および日本のIBD診療を専門としている医療者にヒヤリングを行った．その結果，英国では多くの施設で専門看護師による電話相談が実施されており，内容は体調悪化時の相談が多かった．日本では電話相談未導入である施設が多かったが，導入に前向きな施設もあった．次に，英国での潰瘍性大腸炎(UC)患者の病状認識を把握するため，英国UC患者を対象に生活困難感尺度英語版を開発した．最後に，看護師主導による電話相談支援を実施している日本のIBD専門病院1施設を対象に電話相談内容等を調査した．結果，IBDの体調悪化に伴う相談が最多であった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果および意義として以下2点を挙げる．まず，炎症性腸疾患患者の電話相談システムを導入している英国の支援実態および患者のニーズを把握したことで，今後日本において電話相談システムを普及させる際のポイントが明らかになったと考えられる．次に，日本の電話相談システムの相談実態を把握した結果，炎症性腸疾患の悪化に関する相談が大半を占めていた．この結果から体調悪化に関する支援プロトコルを充実させることで，効率性および安全性を確保した遠隔看護の充実につながるのではないかと考える．

研究成果の概要（英文）：First, we interviewed nurses specializing in inflammatory bowel disease (IBD) practice in the United Kingdom who provide telephone consultation support for patients with IBD and doctors and nurses in Japan. As a result, telephone consultations were provided by clinical nursing specialists at many hospitals in the UK, and the main consultation was care for IBD deterioration. In Japan, many hospitals did not open telephone consultation, but some medical doctors were interested in it. Next, an English version of the Difficulty of Life Scale for UK was developed among UC patients in the UK in order to understand the perception of their physical conditions. Finally, we investigated the contents of telephone consultations at one hospital specialized in IBD in Japan that provides telephone consultation led by nurses. As a result, they supported mainly patients regarding deterioration of IBD.

研究分野：臨床看護学

キーワード：炎症性腸疾患　潰瘍性大腸炎　遠隔看護　英国

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

潰瘍性大腸炎やクローン病を含めた炎症性腸疾患(IBD)は多くが10-20歳代に発症し，血便，腹痛，下痢などの腹部症状を呈する再燃とその症状が軽快する寛解を繰り返す原因不明の難病疾患である．IBD患者は学生生活，就職，結婚，妊娠・出産などのライフステージとともに疾患管理を継続する必要があり，その支援をすることは看護の重要な役割であると考える．

本邦に比し患者数が 3 倍以上存在する英国では，先駆的に看護師主導による再燃予防のための様々な支援が行われている．中でも，Telephone advice line，いわゆる電話相談は再燃予防に効果的かつ患者満足度の高いと言われている看護支援である．これは例を挙げると，IBD患者が定期受診日以外で相談したい案件が発生した場合，病院受診することなく電話にて看護師に相談や依頼をできるシステムである．O'Connor ら(St Mark's Hospital，英国)は2005年よりIBD患者に対しこの支援を導入している．主な支援は，再燃しているか否かを患者とともに話し合い，受診をすべきか，薬剤を変更するべきか否かを判断すること，病院受診日に分からなかった検査結果を説明すること，患者が抱える IBD に関する日常生活やライフイベントの悩みについて話し合い，助言することである．これらの支援導入により，安全性確保のもと，入院などの重症再燃率は大幅に減少し，医療費や人件費の削減も示唆されている．一方，本邦では IBD 患者は基本的に病院に受診をして,看護師など医療者に相談･依頼をしている現状にある.しかし，IBD患者は上述のとおり学生生活や仕事，子育て等が理由で通院の予定が立てづらい現状があるにも関わらず，ライフステージに伴う悩みを多く抱えている．また，IBD患者は過敏性腸症候群を併発していることも多いため，再燃症状か否かについて判断がつきづらく通院まで踏み切れない等の現状がある．以上より，患者の特徴や疾患特性の観点から，定期受診以外における病院受診の前段階として，看護師主導による電話相談を導入する利点は大きいと考えられた．

２．研究の目的

1) IBD患者を対象に，電話相談に関するニーズ(相談内容，相談時間，電話相談に対しバリアになりうる要因等)について把握する．【平成28年度】

2)すでに相談システムが確立している英国施設の看護師および IBD 患者を専門的に診療・支援している国内施設の医療者を対象に，看護師が電話相談で行うべき支援内容について意見を集約する．【平成29年度の計画】

3)研究協力施設が実施する電話相談支援プログラムを作成する．【平成30年度】

4)3)で作成した支援プログラムを IBD患者に提供し，ベースライン(電話相談があった日)，1週間，1か月後の疾患活動度，生活困難感等に対する効果，および介入後の不安解消度，満足度を明らかにする．また，実施可能性の観点から，プログラムの実施状況(相談時間，内容)，プログラムに対する医療者の認識(医療者の満足度，負担，改善を要する点)，安全性を明らかにする．【平成31年度】

３．研究の方法

【平成28年度の計画】

電話相談支援プログラム作成に先駆け，患者，医療者の視点から重要な支援内容を集約する．

[計画-1]　20　歳以上の IBD患者100名程度を対象に，電話相談に対する具体的ニーズ，電話相談導入のバリアになうる要因を質問紙，診療録調査により把握する．

【平成29年度の計画】

[計画-2] 英国の看護師と国内施設の医療者を対象に，電話相談で行うべき支援内容の意見を集約する．

【平成30年度の計画】

28 年度で得られた内容を集約し，研究協力施設の支援に関わる者が参照できる電話相談支援プログラムを作成する．また，プログラムをもとに支援関わる者に対し説明，教育を実施する．

・平成28年度の調査で集約された内容をもとに，研究協力者で討議し支援プログラムを作成する．

・研究協力施設の候補となっている IBD 診療を専門的に行っており，日本炎症性腸疾患研究会に所属している看護師が勤務する関東圏内のクリニック 1 施設と大規模施設 1 施設において，各施設における担当者(看護師，師長，IBD担当医師等)を交えて電話相談について説明・教育を行い，導入の手順，看護師の人員配置，電話相談を実施する場所等を決定していく．

【平成31年度の計画】

各協力施設で各々の支援プログラムを IBD患者に提供し，疾患活動度，生活困難感等に対する効果の検討，および介入後の不安解消度，満足度，実施可能性，安全性の観点からプログラムを評価する．

･研究施設に通院する IBD患者の内,2施設合計72例から相談が得られるまでリクルートする．

・プログラムの効果を前後比較試験により検討する．評価項目は疾患活動度，生活困難感の変化および介入後の不安解消度，満足度である．また実施可能性の観点から，プログラムの実施状況(相談時間，内容)，プログラムに対する医療者の認識(満足度，負担，改善を要する点)，安全性を評価し，これらは電話によるインタビュー，郵送による自記式質問紙調査と診療録調査からデータを得る．

４．研究成果

【平成 28 年度～平成 30 年度】

1) 医療者からのヒヤリング

まず，先進的に炎症性腸疾患(IBD)患者に電話相談支援を行っている英国の看護師に電話調査の方法や患者からのニーズについてヒヤリングを行った．ヒヤリングした病院は，英国の St Mark's Hospital および King's College Hospital である．その結果，血便や排便回数増加などの体調悪化徴候出現時に病院に受診すべきタイミングに関する相談，体調悪化時の薬剤の調節に関する相談が特に相談件数が多いことが明らかになった．

また，電話相談の運用システムは，病院によりばらつきがあることが看護師へのヒヤリングで明らかになった．多くの施設では患者が相談内容をボイスメッセージで残し，後ほど看護師から患者に電話をかけなおして対応していることが明らかになった．その理由として，患者の相談内容に対し，看護師がアセスメントと支援内容の検討に時間を設ける必要があるということであった．一方，これらの運用方法について，患者側からは相談してから返事がくるまで時間がかかるので，電話をしたら直接看護師に相談したい，というニーズがあることが明らかになった．

次に、日本の潰瘍性大腸炎診療を専門とする医師および看護師に電話相談支援の適用可能性についてヒヤリングをした．その結果，多数が導入可能であるとの回答であったが，一方で、直接患者を診ないで薬を調整することについては大きな抵抗があることも明らかになった．

2) 英国の UK 患者の認識の把握

電話相談を先進的に実施している英国での患者の認識を把握するため，英国 King's College Hospital の潰瘍性大腸炎患者 100 名を対象に生活困難感尺度英語版を開発し，その信頼性・妥当性を検討した．なお，本尺度は橋本ら[(1)]により日本で開発されたものであり，信頼性，妥当性が確保されている．調査の結果，構成概念は日本版と同様に「社会生活上の困難感」「排便に関する困難感」「活力・活気の低下」で構成され，併存妥当性，既知集団妥当性，再テスト信頼性，内的整合性が確保された．また，UK 患者は困難の中でも疾患の悪化の予測がつかないことや余暇を楽しめないことなどについて特に困難を抱えていることが明らかになった．

【平成 31 年度】

本邦の IBD 患者へ看護師主導による電話相談システムを先駆的に実施している IBD 専門病院 1 施設を対象に，電話相談内容と相談に対する看護師を含む医療者の対応を診療録および相談調査メモを用いて調査した．調査期間は 2018 年 12 月～2019 年 12 月であった．主な調査内容は．相談日，相談者，疾患，治療内容，相談内容，相談に対する対応であった．相談内容は予備調査をもとに 8 つにカテゴリ化し，調査者が相談調査メモを参照してカテゴリ化した．

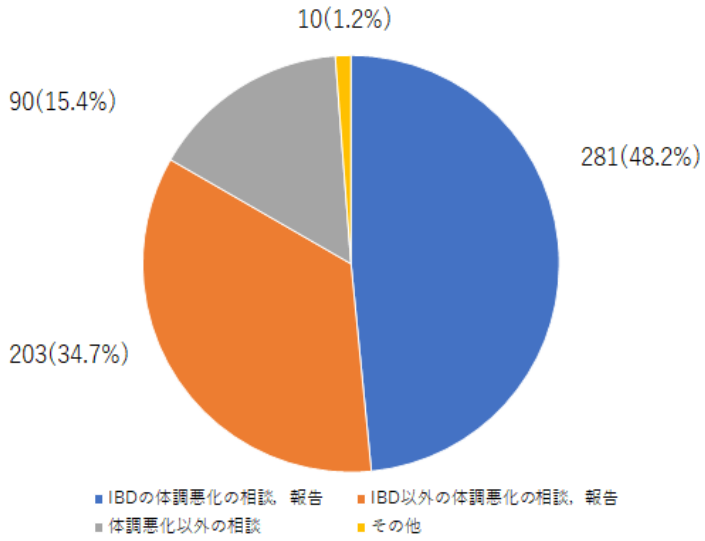
相談件数は延べ 584 件であった．疾患はクローン病が多かった．相談者は本人が 491 件(84.1%)と最多で，次いで家族が 53 件(9.1%)であった．相談内容では，IBD に関する体調悪化に伴う相談または経過報告に関するものが 281 件(48.2%)と最多で，次いで IBD 以外の体調悪化に関する相談または経過報告に関するものが 203 件(34.7%)，体調悪化以外の相談が 90 件(15.4%)であった(図 1)．主な体調悪化以外の相談内容として，受診日，検査日の変更，食事内容の調整，IBD に関する薬と他院で処方された薬の飲み合わせ，転居に伴う転居先の受診先の紹介依頼などが挙げられた．体調悪化に関する相談に対する対応としては，受診を早めてもらうこと，手持ちの注腸薬またはアミノサリチル酸製(内服薬)の量を増やすこと，栄養成分療法の頻度を増やすこと等が挙げられた．

以上の成果をふまえて，現在本邦の IBD 専門施設で電話相談を実施している施設の看護師と電話相談プログラムの洗練を進めており，これまでの実施以上の成果をあげられることが期待される．

引用文献

(1) 橋本 真琴，小池 智子．潰瘍性大腸炎患者の日常生活困難感尺度開発に関する研究．お茶の水医学雑誌．48 巻 2 号．p.71-76．2000．

図1: IBD患者の電話による相談内容内訳(N=584)



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Kawakami A, Choong LM, Tanaka M, Kunisaki R, Maeda S, Bjarnason I, Hayee B.	４．巻 32
２．論文標題 Validation of the English Version of the Difficulty of Life Scale for Patients With Ulcerative Colitis	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Eur J Gastroenterol Hepatol	６．最初と最後の頁 312-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1097/MEG.0000000000001595	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Kawakami A, Waga M, Tyrrell T, Yarrow H, O’Connor M.
２．発表標題 A patient satisfaction survey of the telephone advice line service for the management of Inflammatory Bowel Disease.
３．学会等名 The 11th Europe Crohn’s and Colitis Organization (ECCO)（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 日比紀文監修	４．発行年 2016年
２．出版社 羊土社	５．総ページ数 286
３．書名 IBD診療ビジュアルテキスト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考